

シェイクスピアと聖書

—— 「放蕩息子」のたとえ話を中心として ——

齋藤 透

Shakespeare and the Bible centering on the Parable of the Prodigal Son

Toru SAITO

I

シェイクスピアの作品に現れる聖書の影響を考えることは、どの程度に意義のあることであろうか。現在この問題はシェイクスピア研究の主流をなしているとは思われない。「シェイクスピアと聖書」あるいは「シェイクスピアと宗教」というテーマを扱う文献を目にすることはあまりなく、またこの関係の既刊の書物も絶版になっているものが多く、入手が困難である。

しかしたとえばバージェロン (David M. Bergeron) の「最近のシェイクスピア研究」(SHAKESPEARE: A Study and Research Guide) にはキリスト教的なシェイクスピア研究についてかなりの文献があげられている。彼はさまざまな批判を述べる中で、「主題による批判」という項目を立て、シェイクスピアの「キリスト教的」研究を行ってきたやや小集団の批評家たちがいることを指摘している。いわゆる問題劇 (Problem Plays) に宗教性を見出し、これらの劇は宗教的教義や抽象的な思索、悪への強烈な意識などを共通する特質として有しており、中世道徳劇の影響を強く受けていることを述べている批評家たちがある¹⁾。たとえばナイト (G. Wilson Knight) は「尺には尺を」(Measure for Measure) についてこの劇と福音書との明確な関係をみとめ、公爵の倫理的態度はキリストのそれと全く対応するもので、この劇作の十分な意義を明らかにするためには福音書の教えに照らして読むべきであると述べている²⁾。また悲劇についてもシェイクスピア劇のキリスト教的基盤を求めようとする研究書は種々ある³⁾。そして少なくともシェイクスピアが広い聖書的知識をもって、彼の劇や詩にそれが大いに反映されていることは、これらの文献が証するところである。また彼が作品の中に聖書からの引用や、言及を行っていることは、観衆や読者が聖書の主題や表現に相当親んでいたことが前提になるであろう。従って彼の作品に現れる聖書の影響を探ることは、彼の作品とその時代背景を理解するためにも意味のあることになってくると思われる。ただキリスト教的に偏った立場から、もしくは護教的な態度でこの問題を扱う時には学問的公平を欠く危険が出てくる。また逆にシェイクスピアの宗教観に懐疑論者の態度を見て、その立証に努めるために、ことごとくに不敬なまた冒瀆的な科白を拾い集めて列挙する考え方にもわかには同じがたい。この小論で後述するたとえ話の言及もしくは引用にもその措辞の上から聖書の濫用と感じられる箇所があるが、そうしことからこの劇作家の根本的不可知論や聖なる物への不敬を証拠立てようとする批評家もある⁴⁾。

さてシェイクスピアの時代には聖書はどのように読まれていたのであろうか。彼の父ジョン

はカトリック教徒であったかもしれない。ジョンの死後150年以上のちになって、ストラットフォードにあるヘンリー・ストリートのシェイクスピアの生家西棟の屋根のたるきと瓦の間から発見された冊子には、彼がカトリック教徒であったことを示す「ジョン・シェイクスピアの信仰遺産書」なるものが現れた⁵⁾。そのごく一部を抜粋すると、「ひとつ、私儀ジョン・シェイクスピア、ここに宣明す。われ、かくれたると顕われたるとを問わず、われの受けし恵みのすべてに対し、とりわけ、われを創造(つく)り、あがない、浄め、保主し、主とその真なるカトリックの信仰とを知るよう召命し給いし恵みのゆえに、聖なる主に限りなき感謝を捧ぐ。」とある。しかしこの文書は後に紛失し、更に詳細な検討を受けることが不可能になった。この時代は熱烈なカトリック教徒であったメアリー女王がプロテスタントへの激しい弾圧と迫害を繰り返し、メアリーに(Bloody Mary)のあだ名を生み出し、在位5年の後エリザベス女王が彼女を引き継いで王位につくと、再びイギリス国教会の権威を回復するに至り、穏健ではあるがプロテスタントイズムが復活した時代であり、またエリザベス女王は国民が国教会に出席するのを義務づけ⁶⁾、シェイクスピアの父ジョンは教会に欠席したことで科料に処せられている⁷⁾。シェイクスピア自身がカトリックの信仰の影響を受けていたかどうかははっきりしないが、彼が早祷(Morning Prayer)と晩祷(Evening Prayer)に出席し、少なくとも一年に3回は聖餐式に参加し、また教区牧師から公会問答(Catechism)を学んだことは確実と思われる⁸⁾。つまり国教会の礼拝に参加していたわけである。この当時教区民が親しんでいたものは国教会祈祷書(The Book of Common Prayer)、主教訳聖書(The Bishop's Bible)及びジェネヴァ聖書(The Geneva Bible)、国教会説教集(Homilies)などであり、シェイクスピアの劇作にはこれらの書物からの影響が表れている⁹⁾。この当時行われていた聖書は、1535年のカヴァディル聖書(Coverdale's Bible、英語で印刷された最初の完全訳)、1539年の大聖書(The Great Bible または Cranmer's Bible、英国国教会にはじめて備えられた英訳聖書)、1560年のジェネヴァ聖書(前出、形が小さく、広く家庭に普及した)、1568年の主教訳聖書(前出、ジェネヴァ聖書に対抗する意図でカンタベリー大主教が12人の主教に大聖書を改訳させたものだが、一般にはそれほど普及しなかったらしい)及び1609-10年に完成したルームズ・ドゥエイ聖書(The Rheims and Douai Bible、カトリック側でラテン語聖書から訳したもの、広くは用いられなかった)であったが、後に一般の標準となるべき聖書の必要が痛感されてジェームズ一世によって委嘱された学者や僧侶約50名によって完成したのが1611年のいわゆる欽定訳聖書(The Authorized Version)である¹⁰⁾。しかしこれらの中、最後にあげた欽定訳聖書はシェイクスピアが劇作家としての活動をほぼ修了した時期に世に出た聖書で、これは彼が目を通したかどうかは疑わしい。恐らくシェイクスピアが最もよく利用したと思われるのは家庭に普及していたジェネヴァ聖書と、それほど普及はしなかった主教訳聖書である。

次にシェイクスピアがこれらの聖書の知識をどのようにして獲得したかについていくつかの経路を検討している研究者によれば¹¹⁾、①両親が規則的な聖書通読を通して本人に聖書の知識を植えつけた、②シェイクスピアが通った学校で聖書を教えられ、長い聖句の暗誦もした、③教会に出席して聖書を学んだ、④成人してから個人としての生活を通して聖書を読んでいた、などがあげられているが、結局いろいろな理由から④が主な源泉であるという結論が出ている。シェイクスピアの読書は彼の劇作家としての生涯を通して広汎にわたり、その中には聖書が当然のこととして含まれていて、劇作中にそれが反映されているのは至極当然だといえるのである。また聖書の中ではどの箇所を一番読んでいると思われるかという問題では、シェイクスピアの劇作(*Pericles*を除く)中で聖書の42の書(旧約、新約から18書ずつ、経外典(Apocrypha)の

中の6書からの引用や、それらへの言及があると認められている¹²⁾。更にミルワード (Peter Milward) は、シェイクスピアがもっともよく通じており、また部分的には暗誦もしているという書として、旧約から創世記、ヨブ記、詩篇、シラ書 (または集会の書)¹³⁾、新約からマタイ及びルカ福音書、ロマ書をあげている¹⁴⁾。またシェーンボーム (Samuel Schoenbaum) は創世記の最初の3章で劇中に言及されていない句はほとんどひとつもないし、特にその中のカイン (Cain) の物語は特別に強い印象をシェイクスピアに与えたらしく、少なくとも25回この物語に言及していると述べている¹⁵⁾。[ただしシェーンボームのこの発言にはやや誇張があるように思われる。例えばバートレット (John Bartlett) のコンコーダンスに Cain の項目であげられているのは6カ所、弟のアベル (Abel) の項目で2カ所を数えるのみである。もちろんたとえば *Hamlet* には brother's murder という別の形で言及がされてはいるが。また創世記1章～3章についてノーブル (Richmond Noble) のあげているシェイクスピアの引用又は言及は全部で16カ所にとどまり、これだけでほとんど全部の句が言及されているとは思われない。第1章の言及としてノーブルがあげているのは16, 26, 27の各節のみである。]次に一番多く聖書が引用、言及されているのはどの劇作であろうか。圧倒的に多いのは *Richard II* で、それに続いて *Hamlet*, *Henry VI Part 2*, *Henry IV Part 2*, *The Merchant of Venice*, *Measure for Measure* などがあげられる。イギリス史劇に比較的引用、言及の例が多いのは注目に値するが、これは国王の科白や国政に関する科白に宗教的な内容の表現が比較的多く入っているためと思われるが、このことは王権神授の思想などと考え合わせると興味深いことに思われる。

以上のように聖書とシェイクスピアの劇作との関連は深いものがあり、始めに述べたように彼の作品の中に聖書の影響を探ることは充分意義のあることではあるが、彼がそれぞれの箇所ですら引用、言及を行った意図となると、大いに議論の分かれるところであろう。次に「放蕩息子」のたとえ話について少し詳しく述べながらシェイクスピアの意図についても少しばかり模索してみたいと思う。

II

この「放蕩息子」(prodigal son) という表現は、実は聖書にそのまま載っているわけではない。OED (Oxford English Dictionary) によれば、1551年版の英訳聖書のルカ福音書15章の見出しとして 'The parables of the loste shepe, of the goate that was loste, and of the prodigall sonne' [下線は筆者] (失われた羊、失われた銀貨および放蕩息子のたとえ) として登場したものを初出とするらしく、普通の聖書にはこの最後のたとえ話の内容がルカ福音書15章11～32節に記載されているのみであるが、内容に対する見出しがしるされている聖書はかなりあるようで、手元にある外国語の聖書の中6種の言語による版はいずれも見出しをつけており、また日本聖書協会の新共同訳聖書では(「放蕩息子」のたとえ)とゴシック体で見出しが書かれている。このたとえ話がいかに英米文学上でも有名な題材になっているかは英文引用句辞典¹⁶⁾に記載の 'prodigal' の用例が17例、たとえ話全体の中の句の引用例はそのおよそ2倍に及ぶことでもわかる。そのうち1例を次にあげてみよう。

"The prodigal has returned," he said, "We will not fail to kill the fatted calf."

[下線は筆者] —— Maugham: *The Making of a Saint*

この parable の文学に引用されている他の例として Graham Greene の短篇 "A Drive in the Country" (1937) に、また W. S. Maugham の短篇 "The Ant and the Grasshopper" (1936) に言及されて効果を収めているし¹⁷⁾、また Hall Caine (1853–1931) に "The Prodigal Son" (1904)

という作品もある。

このたとえ話の内容は周知のこととは思いますが、次に新共同訳聖書の訳文をそのまま引用することとする。(ルカ福音書15章11～24節、25～32節は梗概をしるす。)

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。そこで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆¹⁸⁾を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と、』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛¹⁹⁾を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

この物語の続きは福音的には重要な部分であり、兄の存在は大きな意味を持っているのであるが、シェイクスピアの引用はこの部分にはほとんど関係していないので梗概だけを述べると、父から信頼を受けて共に働いてきた兄の方は何年も忠実に働いてきたのに子山羊一匹もらえないと不満をもらす。父は答えて言う、「お前のあの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜ぶのは当然だ。」と。

この放蕩息子のたとえ話は恐らくイエスが語ったたとえ話の中では最もよく知られたものであろう。また長さからいっても随一といってよい。これに次ぐものは恐らくマタイ福音書25章 [ルカ福音書19章にも類似のたとえがある] の「タラント」のたとえ (The Parable of the Talents) であろう。しかし多くのたとえ話が共観福音書 (Synoptic Gospels. マタイ、マルコ、ルカの3福音書を指す) で共通に用いられているのに、この放蕩息子のたとえ話はルカ福音書のみに出ているものである。この「放蕩息子」に代わって、むしろドイツ語圏で呼ばれる「失われた息子」(Der Verlorene Sohn) のたとえとする方が適切だと主張する学者もある²⁰⁾。

それはこのルカ福音書15章の三つのたとえ話 (失われた羊、失われた銀貨、放蕩息子) の再発見と、その喜びが語られているからだというのである。共通の主題は喪失・再発見・喜びであり、家出をした子が放蕩をしたことが中心主題ではなく「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」ことが重要であると説いている。さて、このよく知られたたとえ話にシェイクスピアは彼の劇作の中で、福音書のたとえ話中では最も頻繁に言及している。他のたとえ話が言及されることも全体の数から言えば決して少なくはないが、一つのたとえにつ

いて多くてせいぜい2回程の言及である。しかし‘prodigal’という言葉はバートレットのコンコーダンスに22回出てくる²¹⁾。他に prodigally という副詞形, prodigality という名詞形が各1回出てくるが、もう一つ prodigious という形で prodigal の誤用が1回ある。この語については後述するが、‘prodigal’ という語のうち①「放蕩息子」の意味の名詞用法になっているものは10例であり、②形容詞として「放蕩の」の意味に用いられているのは4例、③残りの8例は形容詞として profuse, lavish, abundant などの意味で使われているので、今は①②の例を検討してみたい。

まず①の中で特にこのたとえ話についてふれるところの多い用例について述べることにする。配列順は一般に各作品の創作年代とされている順とした [引用例文中の下線は筆者]²²⁾。

1. Dromio of Syracuse. Not that Adam that kept the Paradise, but that Adam that keeps the prison: he that goes in the calf's skin that was killed for the Prodigal: he that came behind you, sir, like an evil angel, and bid you forsake your livery. — *The Comedy of Errors* (IV .iii. 15~19)

「ドローミオ弟。天国の番人のほうじゃなくって、監獄の番人である典獄のほうのアダムですよ。放蕩息子をご馳走するために殺した牛の革を着ている人ですよ。悪天使のように背後にしのびよって以後自由を束縛するぞっていう人ですよ。」

2. Gratiano. How like a younker (Arden 版は younger) or a prodigal
The scarfed bark puts from her native bay,
Hugg'd and embraced by the strumpet wind!
How like the prodigal doth she return,
With over-weather'd ribs and ragged sails,
Lean, rent, and beggar'd by the strumpet wind!

— *The Merchant of Venice* (II .vi.14~19)

「グラシアーノウ。飾り立てた舟が帆をあげて港を出てゆく時には、たとえ話の放蕩者の弟息子そっくり、遊女(あそびおんな)の風がちやほや、手をひっぱったり、抱きついたり！さて、舟が帰って来る——放蕩息子の御帰還そっくり、風に打たれ雨にやられて肋材(あばら)は痛み、帆はぼろぼろ、遊女の風に剥がれて、やせて、やつれて、乞食よろしく！」

3. Falstaff. that you would think that I had a hundred and fifty tattered prodigals, lately come from swine-keeping, from eating draff and husks.

— *King Henry IV Part 1* (IV .ii.36~39)

「他人様がごらんになりゃ、つい昨日まで豚飼いでもしやがって、オカラや糞穀ばかりくらった道楽息子をよ、そのままぞっくり百五十人、引っ立ててきたみてえに思うかもしれねえがね。」

他の例はそれぞれ 4. *The Merchant of Venice* (III .i.48~50) 5. *King Henry IV Part 2* (II .i.160~163) 6. *Twelfth Night* (I .iii.25~26) 7. *The Merry Wives of Windsor* (IV .v.7~9) 8. *Troilus and Cressida* (V .i.34~37) 9. *Timon of Athens* (IV .iii.279) に出ている。更に②形容詞として「放蕩の」の意味に用いられた4例は、それぞれ 10. *King Richard II* (III .iv.29~31) 11. *The Merchant of Venice* (II .v.14~15) 12. *As You Like It* (I .i.39~41) 13. *The Winter's Tale* (IV .ii.103~106) にある。更に、前述した prodigious という誤用の例がある。それを次にしるす。

14. Launce. I have received my proportion, like the prodigious son, and am going with Sir Proteus to the imperial's court.

— *The Two Gentlemen of Verona* (II .iii.3~5)

「おれは放浪息子 (放蕩息子) のように、相続の分捕金 (分与金) をもらって、サー・プロテウスさまといっしょに、帝国 (皇帝) さまの御殿にゆくところ。」

この箇所では道化である Launce がいわゆる malapropism [言葉の誤用。Sheridan の劇作 'The Rivals' (1775) の中の人物 Mrs. Malaprop が多音節の語を誤って多用する習慣があったことに起源を発する.] で 'prodigious' (並外れた; 驚異的な) を 'prodigal' のつもりで用いている。上の引用例中には他にも二つの malapropism が含まれている。

以上の 'prodigal' の用例を検討すると、放蕩息子のたとえ話の内容を全体として捉えた用例は見出しかねるが、このたとえ話をルカ福音書15章の他の二つのたとえ話、すなわち百匹の羊のうちの一匹が見失われた話と、十枚の銀貨のうち一枚が見失われた話と合わせて考えると、前述の通り「喪失・再発見・喜び」が共通の主題と思われるので、この意味でミルワードの著書「シェイクスピアと宗教」²³⁾の冒頭にある論文「シェイクスピアと放蕩息子」で著者が説くように、このたとえ話の言及されているシェイクスピアの劇作に「失われたものの回復」という筋の流れを読み取ろうとする試みは意味のあることと思われる。たとえば、先に引用した1. *The Comedy of Errors* からの用例では、2組の双子の兄弟のうち、召使いの方の組の弟である Dromio に、単に牢獄の典獄の説明をするのに「放蕩息子をご馳走するために殺した牛 [原文では calf (子牛)] の革を着ている」とわざわざ言わせているのは、創世記に述べられているように、Adam が楽園 Eden の番人の身分から、禁断の木の実を味わった罪で Eve と共に追放される際に二人が着せられた皮の着物 (coats of skins) から連想が移って、放浪の旅から帰ってきた prodigal のために屠られた子牛の革を着て歩く人間と言っている表現は、単なる軽口以上の意味がこめられ、後になって主人役の双子の兄弟が人違いの混乱のあげく、父親の Egeon に再会するまでの、数奇な変遷の物語の持つ意味への手がかりとなるという趣旨の見解を、意味なしと斥けることは出来ないように思う。

あるいは3. の引用例で、*King Henry IV Part 1* の喜劇的人物の傑作である Falstaff を放蕩息子に関連づけるものとして、戦争のために徴兵したやくざな連中を Falstaff が 'tattered prodigals' (ボロボロになった放蕩息子) と呼び、また5. の *King Henry IV Part 2* の用例では、Falstaff は居酒屋のおかみ Quickly にむかって、「壁には放蕩息子の話の絵²⁴⁾などをかけたほうがましだ」と言ったり、7. の *The Merry Wives of Windsor* の例では、再び宿屋の亭主が、「Falstaff の部屋には放蕩息子の絵が真新しく描かれている」ことを述べ、前述の Falstaff 自身のおかみへの絵の推奨の言葉と合わせて、Falstaff にこの Prodigal Son の絵に対する特別の愛情を持たせているように見受けられることも偶然ではなく、Falstaff の放蕩息子的性格を指すものとして用いてあるのだと著者ミルワードが説くのもある程度は首肯される。しかしシェイクスピアが「この世での善行はいつでもよく、ただ信仰あるのみ」というルターの教義のパロディーを意図して、フォルスタッフ像を創り出したのではないかという著者の見解には素直に同じがたい。

また2. の *The Merchant of Venice* からの用例では、Jessica とかけ落ちする Lorenzo を待ちながら Gratiano が述べる科白の中で、物事はそれが手に入る前に追っかけている間の方が熱が入ることのたとえとして、出港する船を財産の分け前をもらって出かける放蕩息子にたとえ、帰港する船を尾羽打ち枯らして父のもとに帰る放蕩息子にたとえているのは、別にとり立てて

意味はなさそうだが、比喩としては見事だと思われる。このような比喩をシェイクスピアが用いているのは、当時の英国の民衆に放蕩息子のたとえ話がいかに浸透していたかを物語るものだと考えられる。

②の形容詞としての用例の中で、12. *As You Like It* で用いられる例では、兄 Oliver に酷使される弟 Orlando の科白として次のように述べられている。

Shall I keep your hogs, and eat husks with them? What prodigal portion have I spent, that I should come to such penury?

「豚でも飼って、糶穀をいっしょに食っていようか。こんな素寒貧な目にあわなきゃならんとは。ぼくがよっぽどひどく（相続の分け前を）食い潰したともいうのかなあ。」[カッコ内は筆者の挿入、なお参考までに上掲の阿部知二訳に対し、小田島雄志訳の一部を紹介すると、<私は親の財産を食いつぶした放蕩息子なのですか>となる.]

この中で対比される弟と兄は、兄の横暴に対し不満を述べる弟の言葉を通して兄弟の対立を現している。この後で Orlando は父の残したわずかな分け前 (the poor allottery) を要求して、それを手にしてアーデンの森へ行くのである。

上述以外の用例では 'prodigal' はたとえ話の中の叙述を伴うことなく単独で用いられている。たとえば13. *The Winter's Tale* の用例は <compass'd a motion of the Prodigal Son (「放蕩息子」の人形芝居をやって歩いていましたよ)> であり、前後関係からは取り立てて意味があるとも思われず、ただそういう芝居が当時行われていただろうという推測ができる位である。

またノーブルはシェイクスピアは普通は聖書のたとえ話 (Parables) を凝縮してパラフレーズしていると言い、先に用例を示した2. の *The Merchant of Venice* における Gratiano の、放蕩息子のたとえ話の応用や、*Measure for Measure* でのタラントンのたとえを参照せよと述べている²⁵⁾。従ってシェイクスピアは比喩的効果をあげるためには、たとえ話の一部を呈示すれば観衆はただちに聖書のたとえ話全体を連想して比喩の意図を理解したものと思われる。このように考えると 'prodigal' という話が頻繁に劇中に用いられるのは、前にも述べたがそれだけ民衆の間にこの語にまつわる聖書のたとえ話が行き亘っていたことを示すものではなかろうか。この話が当時の文学においてのなじみ深い題材であったことの一例として、*King Henry IV Part 2* のハル王子 (Prince Hal) の悔い改めた行動が例証すると述べる辞書²⁶⁾ や、この寓意物語が1540～75年頃のイギリス演劇でしばしば取り扱われた題材で、初期の Tudor 期の劇作家に対する大陸の新古典派作家の影響をうかがうに足る証拠とし、George Gascoigne (c. 1535または42～1577) の 'The Glasse of Government, a tragicall Comedie (1575)' などをその劇作の例としてあげている辞書²⁷⁾ もある。この Gascoigne の劇作について Encyclopaedia Britannica は放蕩息子のテーマに基づく教訓劇 (didactic drama) であるとのみ述べている²⁸⁾。こうなると当然道徳劇 (Morality Play) にも連想が及ぶのであり、シェイクスピア劇への道徳劇の影響は容易にたどることができるといわれる²⁹⁾ が、このことを論ずるのは、この小論の当座の目的とするところから逸脱する恐れがある。

以上のように放蕩息子の物語がシェイクスピアの劇作に影響を与えていることを知ったわけだが、このたとえ話の出典であるルカ福音書からはほかにも多くの引用がなされていて、劇作の数十カ所に引用、言及が指摘されているが、マタイ福音書からの引用はまたその倍に近い³⁰⁾。そして新約のマタイ、ルカ両福音書及びロマ書の中からは引用のほかにも劇作の中心的思想やイメージをも引き出していると考えられる学者もある³¹⁾。

Ⅲ

シェイクスピアと聖書との関係を、主として「放蕩息子」のたとえ話についての用例を論じながら考察してきたのであるが、シェイクスピアの劇作に聖書の影響が見られることは、多くの引用や言及によって事実として確認できている。しかしながらこのことから彼の各劇作における個々の引用、言及の意図を探り、ひいては彼の宗教観を推量することはかなり困難であり、これを考究する研究者自身の宗教観も影響してくる問題であって、出された結論に対しては場合によって賛否の見解が極端に分かれることもあると思われる。ここに至って筆者はフリュシエール(Henri Fluchère)がその著書で述べているように、シェイクスピアの全作品の道徳的ないしは哲学的な((軌跡(グラフ)))をあまりに厳密に描こうとしてはならないのであり、シェイクスピアのような作家の著作のもつ無限の複雑性は、一本の幾何学的グラフのような堅苦しい枠の中に閉じこめられることを拒絶するのだという考え³²⁾に惹かれるものを感じる。ただフリュシエールがさらに言葉を継いで述べているように、シェイクスピアの主題及び表現手段の多様性のゆえに、その鉱脈を探る仕事は300有余年後の今日も終りに達したわけではなく、驚くほどさまざまな解釈はシェイクスピアの読者や観客の精神的経験を豊かにしてくれるものであろうから、この小論の志す一鉱脈の掘削も認められてよいのではあるまいかと思っている。

注

- 1) バージェロン『最近のシェイクスピア研究』(北川重男訳, 三修社, 1984), pp. 88~90.
- 2) G. Wilson Knight, "The Wheel of Fire", (New York: Routledge, 1989), pp. 73~82.
- 3) バージェロン. 前出書. pp. 138~143
- 4) Peter Milward, "Shakespeare's Religious Background", (Tokyo: The Hokuseido Press, 1973), p. 89, NOTES p. 283 v. 9.
- 5) S. シェーンボーム『シェイクスピアの生涯 記録を中心とする』(小津次郎他訳, 紀伊国屋書店, 1982), pp. 49~52.
- 6) S. H. Burton, "Shakespeare's Life and Stage", (Edinburgh: Chambers, 1989), p. 18.
- 7) M. M. バダウイ『シェイクスピアとその背景』(河内賢隆, 兼谷英夫訳, 而立書房, 1985), p. 58.
- 8) S. シェーンボーム. 前出書. p. 61.
- 9) Milward, *Ibid.*, p. 37.
- 10) 各種の聖書についての説明は, 寺沢・早乙女・船戸・都留共著の『英語の聖書』(富山房, 1982)及び清水 護『英国民の伝統と聖書—英語と聖書—』(研究社, 1957)を主として参考にした.
- 11) Naseeb Shaheen, "Shakespeare's Knowledge of the Bible-How Acquired", (Shakespeare Studies XX. ed. J. Leeds Barroll III, New York: Burt Franklin & Co., 1988).
- 12) Richmond Noble, "Shakespeare's Biblical Knowledge" (New York: Octagon Books, 1970), p. 20.
- 13) Ecclesiasticus. 経外典(Apocrypha)に含まれるが, 日本聖書協会発行の新共同訳聖書には〈旧約聖書続篇〉として経外典を含め, その中にシラ書の訳も入れられている.
- 14) Milward, *Ibid.*, p. 87.
- 15) S. シェーンボーム. 前出書. p. 64.
- 16) Sanki Ichikawa and others, "The Kenkyusha Dictionary of English Quotations" (Tokyo: Kenkyusha, 1965), pp. 297~301.
- 17) 野口 肇『現代英文学と聖書(コンラッド・ロレンス・グリーン・モームの場合)』(学書房, 1980), pp. 143~152.

- 18) 「いなご豆」の英訳は *husks*. 原典のギリシャ語で $\kappa\epsilon\rho\alpha\tau\acute{\iota}\omega\nu < \kappa\epsilon\rho\acute{\alpha}\tau\iota\alpha = \text{the fruit of locust-tree}$. 研究社新英和大辞典では (locust tree=locust として, locust の項には 3 《植物》 b. イナゴマメ (*Ceratonia siliqua*) 《carob ともいう》) とある. carob は地中海沿岸産のマメ科サイカチ類の高木でサヤは食用になることが知られている.
- 19) Authorized Version では 'fatted calf' と訳されている.
- 20) 加藤常昭『聖書を読む 3 ルカによる福音書』(筑摩書房, 1989), pp. 118~119.
- 21) John Bartlett, "A Complete Concordance of Shakespeare", (Macmillan, 1984), p. 1222.
- 22) 引用はすべて "The Oxford Shakespeare Complete Works" (ed. W. J. Craig, Oxford: Oxford Univ. Press, 1978) より. また訳文は筑摩書房版「シェイクスピア全集」の各訳者による.
- 23) ミルワード『シェイクスピアと宗教』(山本 浩訳, 荒竹出版, 1977), pp. 3~13.
- 24) 放蕩息子の話の絵については平凡社大百科辞典(1985年版 pp. 888~889)に, 「図像化されたものとしては11世紀のビザンティンの写本画に初期の例が見られ, 西欧でも中世末期以降主題とされ, 弟が回心して父のもとに帰ろうとする場面や父が彼を温かく迎え入れる場面などが多くあらわされた。」としてレンブラントの〈放蕩息子の帰還〉(c 1668)とボスの〈放蕩息子〉(放浪中の姿か?)の二枚の絵の写真がかかげてある. [ボス(又はボッシュ, H. Bosch)の画集には〈蕩児の帰宅〉という別の絵もある.]
- 25) Noble, *Ibid.*, p. 176.
- 26) "Benét's Reader's Encyclopedia" (New York: Harper & Row, 1987), p. 791.
- 27) 『研究社英米文学辞典』(1961), p. 861, p. 376.
- 28) Encyclopaedia Britannica 第10巻(1964), p. 4.
- 29) Milward, *Ibid.*, p. 34~35.
- 30) Noble, *Ibid.*, pp. 292~295.
- 31) Milward, *Ibid.*, p. 87.
- 32) アンリ・フリュシユール『シェイクスピア エリザベス朝の劇作家』(笹山 隆訳, 研究社, 1983), pp. 317~319.